

市場経済の二面性

--- 平等と差別 ---

篠原三郎

まえがき

1. 使用価値と価値法則
2. 市場経済と性差別

あとがき

補論

まえがき

近代絵画史をたどってみると、資本主義経済ではもっとも大きなテーマとなり、もっとも崇められてもいる金とか、貨幣が描かれている作品に出会うことは、ほとんどない。高価なダイヤモンドなどの宝石類などより、風景だの、花、果物、また、人物、とりわけ女性が好んで描かれてきているように見える。なぜなんだろう、と思いたくなる。そんなことを考えている折、足立真理子氏の以下のような文章が目につき、そこで氏が提起されている問題と、近代絵画をめぐる上述の疑問とが次第に重なってきてしょうがないのである。足立氏は、上野千鶴子氏とのある対談のあとで、「グローバル化へのフェミニスト^{アナリティクス}分析^{をめぐって}⁽¹⁾」という補論を書き、その末尾でつぎのように述べているのだ。

「対談中、上野さんがおっしゃられた「ポリティカル・エコノミーは文化の政治が手におえていない」という指摘は、経済学が文化を自らの領域から放逐することをとおして<理論>構築してきた過去が問われているのだということにほかならない。経済学は文化を“嫌い”，ブラックボックスに入れる。政治経済学は文化が“嫌”^{しいや}で、大文字の政治的なるものに翻訳する。このかつてもそしてなお現在も反復 = 再生産される、経済学的方法への批判こそが、フェミニスト政治経済分析あるいはフェミニスト・アナリティクスの道程であると言えよう。そして、その過程は、もしかしたら、「政治経済学」という、みずからの仮構された<起源>を曝すものとなるのかもしれない⁽²⁾」。

この「政治経済学」と文化との関わりを考えながら、また、以前、性差別問題のとらえ方をめぐって取り上げたことのある拙論のある点が、あらためて思われてきてなくなるのである。

それは、資本主義と性差別の関係認識に対する二宮厚美氏の、つぎのような所説をめぐってのことである⁽³⁾。

「個々の資本にとって第一義的関心はあくまで労働力の使用価値と価値にあるのであって、その持ち主の人格の差異、したがって性差にあるわけではない。資本は労働力の使用価値に何らかの欠陥や制約があると見なすときには、その原因がたとえば老人であるとか年少者であるとか障害者であるとかの時と同じように、女性にたいしても労働力価値の切り下げをもって報いる⁽⁴⁾」。

この二宮氏の所説にたいして、わたくしは、労働力商品をその使用価値と価値の関係の問題としてしか処理しえないところに、むしろ、資本の性差別性の原因があり、資本は、基本的に、ジェンダー・ニュートラルではないことを強調した⁽⁵⁾。

本稿は、以上のようないくつかの連想のなかから、資本主義の市場経済の特徴をあらためて原理的に考察しようとするものである。

1. 使用価値と価値法則

「まえがき」でのべたように、二宮氏の所説にたいして、わたくしは、資本の論理は使用価値と価値の関係を通してしか労働力商品に対処しえないがゆえに、それが原因で性差別的にならざるをえないことを指摘してきたのだけれども、よく考えてみれば、資本主義市場経済は性差別問題にかぎらず、すべての商品にたいしても、一見、平等主義的にみえるが、他方で原理的には差別的となっているのではなからうか。

飛躍していくような話となるが、たとえば、『資本論』第 1 巻の商品の、いわゆる価値形態論のところにてでくる、例の「D 貨幣形態⁽⁶⁾」の下の図がいつも不思議と思いだされてくるのである。

2 オンスの金	}	= 20 エレのリンネル
		= 1 着の上着
		= 10 ポンドの茶
		= 40 ポンドのコーヒー
		= 1 クォーターの小麦
		= ½ トンの鉄
		= X 量の商品 A

2 オンスの金で、20 エレのリンネルの、1 着の上着の、..... X 量の商品 A の価値たちが表現されていくこの図である。その価値形態論をめぐる諸議論、諸論争のあることは、ここではすべて措くとして、わたくしの目下の関心は、こういう価値表現を通して価値が付き、それぞれの商品が貨幣の持ち主のもとに売られていく日常的な現象をめぐってのことである。この取引中、

価格は、各商品の使用価値の性格そのものとは関係がなく、また、相談もなく決められている。リンネルをはじめ、その他のどの使用価値も、それ自体をどのように分析しようが、2オンスの金の価値であるとか、価格であるとかといったようなことはでてこない。だから、使用価値に、もしも¹こ²ころ³でもあるなら、20エレのリンネルは、なんで2オンスの金と表現されたのか、なんで1着の上衣の価値と自分は同じなのか、違和感をもち、疑問心を抱くかもしれない。しかしながら、商品の価値、価格は、そんな使用価値の気持ちにおかまもなく決められていく。にもかかわらず、その間、商品取引にかかわった売り手と買い手のあいだでの“思想”は、自由、平等……であるとされている。リンネルとか、上衣とか、コーヒーとかいった物たちの売買ではなくて、人間の労働力という商品の売買が語られている「貨幣の資本への転化」のところで、マルクスは、周知のごとく、つぎのように述べているけれど、労働力商品の売り手と買い手の関係にみられた“思想”は、リンネル、上衣などのような物の商品の売買にかかわる人間たちのあいだにも、同じように、当然流れているといえるのではなからうか。

「労働力の売買がその限界のなかで行われる流通または商品交換の局面は、じっさい、真の天赋人權のエデンだった。ここでただひとり支配するものは、自由、平等、所有、そしてベンサムである⁽⁷⁾」。

繰り返すが、この折、「自由、平等、所有、そしてベンサム」でありうるのは、あくまでも、商品取引を取り仕切る売り手と買い手のあいだでのことである。取引される商品の価値、価格がいくらに評価されているかは、使用価値には無関係である。したがって、『資本論』でも、商品の価値、価格は、その使用価値から独立的なこととして規定されている。

「使用価値としては、諸商品は、なによりもまず、種々に違った質であるが、交換価値としては、諸商品はただ種々に違った量でしかありえないのであり、したがって一分子の使用価値もふくんではいない⁽⁸⁾」といい、また、「種々の商品の種々の使用価値は、特殊な一学科、商品学の材料を提供する。使用価値は、ただ使用または消費によってのみ実現される。使用価値は、富の社会的形態がどんなものであるかにかかわりなく、富の素材的内容をなしている⁽⁹⁾」とのべ、使用価値は、(やむをえない事情があったかもしれないが、残念なことに)経済学の対象より外されていく⁽¹⁰⁾。価値、価格の問題がかかわらざるをない限りにおいてしか登場してこなくなる。この社会では、使用価値問題は、主役となりえないのである。そのため、リンネルや上衣、コーヒーなどの商品の使用価値の側から、商品取引の過程を貫くところの、いわゆる価値法則にたいして、一言も言葉を発しなかったし、また、発しもしえなかったが、もし、口出しでもできるようだったら、どうなるものであろう。市場社会は大騒ぎになったかもしれない。

ところで、資本主義経済に不可欠で、もっとも特徴的な労働力商品のあいだではどうなるものであるか。もちろん、この経済社会の商品であれば、特徴的とはいえ、他の物の商品取引と同じよう、価値法則にしたがわざるをえない。しかし、この商品、既知のように、その売り手という人間の身体のうちにはしか存在しえないものである。人間にはこころも言葉もある。自由、平等、……といわれながら、しかし、その労働力商品の価値が性別によってその評価が異なれば、

安価にされた性の人間の側からいずれ疑義がただされ、異議が唱えられるのも不思議ではない。労働力商品は、資本主義市場経済のアキレス腱なのだ。労働力商品の価格である賃金は、人間の生存、生活に必要な不可欠な条件である。労働力商品の買い手は資本家だが、性差にたいして資本はニュートラルであるといつて済ますほどには、ことは単純ではありえない。傷んだリンゴがそうでないものと比べ少々安いというのと、その社会的影響とその意味が大きく異なる。労働力商品の使用価値の差異の問題としては許されなくなる。フェミニストからの叫びがきこえてくる。物の商品には、その価値、価格を使用価値の性格にかかわらず決めておき、労働力商品については、労働というその使用価値によって直接その価値、価格を決めていく市場経済のルールを仕切る価値法則の意味が、そのうちに、問われてくるだろう。やがては、物たちからも不平、不満が起きてくるかもしれない。

価値法則は、資本主義体制の存続にとっては極めて合理的な経済法則であるとしても、いかなる商品であれ、使用価値の側からみれば、すべてに不平等なのである。ダイヤモンド、エメラルドなどといった宝石類などの商品が高級品と称揚され、じゃがいもや大根などは大衆の商品だと見下されたり、あるいは、他の社会的諸条件については考慮もせず、一つの物指しのみによって、女性の労働力が男性のそれよりも劣っていると計られたのでは、公平に扱われているとはいえない⁽¹¹⁾。

手元になくとも生きていけるダイヤモンドの価値、価格は、生活必需品の米と比べて驚くほど高い。米は異議を申立てたくなる。「まえがき」の冒頭のことが思い起こされる。画家たちは、市場経済でもっとも有り難がられるような金や札束、ダイヤモンドなどは描きたがらず、花や果物、風景などを好んで描きつづけてきたのも、この社会での人々への癒しもあるが、弱い地位に社会的に置かれてきたもののこころを代弁してきたことなのかもしれない。しかし、そういう絵画でさえ、商品化せざるをえないし、その歪みもまた受けざるをえないことも必至である。

もともと価値法則にしたがって商品価値、価格が決められていく資本主義市場経済は、普遍的な存在ではなく、歴史的な経済の一つのあり方にすぎない。「自由、平等、所有、そしてベンサム」であるのは、「商品交換の部面」にすぎないこと、結局、資本主義市場経済での売り手と買い手のあいだでの現象にすぎないことなのである。商品の使用価値の立場からみれば、「自由、平等、所有、そしてベンサム」からほど遠い経済社会のことなのである。だから、再三取り上げてきたところの、労働力商品の使用価値をめぐる性差問題では、物とは違って、いつまでも座視しているようなことはなく、性差別であることを主張しはじめざるをえない。

2. 市場経済と性差別

ともあれ、前述のように、一方で平等でありつつ、他方で差別を生みだしていくような特徴をもつ価値法則のうえに成り立っている資本主義市場経済、そこで展開されていく資本蓄積の過程も、うえのような特徴をもちながら遂行されていくであろう。資本は、剰余価値を、利潤を目的

とし、それを追求していく。剰余価値は、利潤は、労働を源泉としている。労働力の使用価値は労働である。この使用価値が資本の目的にとってより合致しているかどうか、という点からみて、労働力商品の処遇もかわり、その価格である賃金も違ってくる。できれば、全生活時間を労働時間に転化、利用したい資本にとって、生活、妊娠、出産といった女性労働者の身体的特徴は制約とされる。資本に都合のよいように、資本主義経済の存立に不可欠な産業予備軍⁽¹²⁾にまずはじめに参加させられたり、あるときは、労働力の再生産のための専従者として家庭に押し込められたり、又、必要とあれば、「労働力の女性化」といわれ、そこから引き出されるような事態も生じる。資本の力は強い。資本主義という舞台では、女性は「第二の労働者」扱いなのである⁽¹³⁾。

また繰り返すが、労働力の使用価値である労働は、それ以外の物の使用価値と違って、周知のように商品の価値を形成していくユニークな存在である。すべての商品価値は、人間の労働量によって規定されている。かかる価値法則の上に立っている資本主義である。労働はもちろんそれを欠いては人間の社会生活がありえないほど、重要なものではあるが、人間の諸活動のなかの一つにすぎないものなのである。しかしながら、現実には、それがなによりもまず、すべてに最優先され、資本主義体制のあり方が規定されていく。「この規定を支えているのは、人間の社会的労働のみが価値を生産し、したがって剰余価値を生産しうるのでという徹底した人間中心主義にほかならない⁽¹⁴⁾」と、岩井克人氏は指摘しているが、正しくは、資本主義は労働中心主義なのである⁽¹⁵⁾。そのため、人間の諸活動の他の営みは軽視、無視されるか、周辺に追いやられる。岩井氏の理解とは正反対で、人間は価値法則に支配されることによって疎外されているのである。この体制が資本主義のシステムなのである。

ここで、「まえがき」での足立真理子氏の言葉、「経済学は文化を“^{きら}嫌い”、ブラックボックスに入れる。政治経済学は文化が“^{しいや}嫌”で、大文字の政治的なるものに翻訳する」があらためて思い返されるが、しかし、「文化を“^{きら}嫌い”」、「文化が“^{しいや}嫌”で」いるのは、経済学の側に責任があるだけではなく、資本主義経済という現実のなかに真因があるのではなからうか、と思われるのである。

ともあれ、話は再び振出しに戻ることになるが、労働力の性差別の問題は、「労働力の使用価値と価値」の問題であって「持ち主の人格的差異、したがって性差にあるわけではない」といっただけでは、事は済まされないのである。それだけでは、資本主義市場経済の側に立った言い分に終わってしまう。性差のある労働力商品の主張に耳を傾け、人格的な差別とはならない経済社会を追求していいはずである。さらには、他のすべての商品にたいしても、それらの使用価値たちの願いが尊重しあえていけるような社会となっていければ、なおのこといい。こうなれば、それはもう、価値法則のみの貫徹が許されている経済システムとは違った社会になっているのかもしれない。また、そうしていかなければならないものであろう。

あとがき

価値法則が最優先される市場経済社会の二面性の問題を云々、検討しているうちに、資本と労働の移動の自由を前提とした『資本論』でみるような原理的な世界から、歴史的に株式会社制度の普及とともに資本の集積・集中が展開してしまってきている現代の資本主義のもとでは、もうすでに、その前提は、すっかり社会的になってしまってきている。独占的組織は、独占的地位を梃子にして商品の独占価格を形成してくる。つまり、価値法則という経済法則のうえに独占的支配という経済外的な政治的力学を駆使してくるし、できるようにもなる。独占という、このような事態は、この歴史的段階でのもっとも基本的な特徴であるが、もっと身近で卑近な例をあげれば、ブランド商品の使用価値と価値の関係のあり方もそうであろう。ブランドという使用価値の名声によって、その価格が大きく左右される。商品の価値は、その使用価値のこころを無下にすることができなくなる。使用価値の蘇生である⁽¹⁶⁾。あるいは、いままで経済価値ゼロともみなされていた自然環境の使用価値の意味や意義が改めて見直され、環境問題をテーマとする経済学が生まれてきてもう久しい。また、フェミニズムが問うていることも突き詰めていけば、すでに指摘してきたように、資本主義の市場経済の根幹の問題に打ち当たっていくはずである。

ともあれ、上述のような現代社会の動きをみていると、使用価値にかかわる問題の重要性が資本主義市場経済という制約下にあるわけではあるが、現実にも、また、思想、理論のうえでも広く語られるようになってきていることを示しているし、このことが、さらに資本主義市場経済そのものの中核の問題に、また、「政治経済学」の方法のあらたなる再検討にも連なっていけば、とも、思うのである。そして、市場経済が支配的に形成している文化から解放され、それを超える、それぞれの使用価値のもつ多様性、可能性を十分開花できる社会文化が創造されるようになれば、と願うのである。もちろん、そのためには、現実には、限りないほどの多くの難問を解決していかなばならないことなのだが、しかし、歴史は、否応もなく歩きはじめている。

補 論

商品の価値の実体である労働をどのように認識し、その価値法則をいかに論証していくかをめぐっては議論のあるところである。もちろん、岩井克人氏のように、価値法則そのものを否認する考え方もある。しかし、いかなる立場をとるにしろ、商品の使用価値は、経済学の世界では二義的な地位に追い遣られている。

既知のことばかりであるが、引用を多用することになるけれども、復習してみたい。

マルクスは、商品交換にあたって、両商品に「共通なものは、商品の幾何学的、物理学的、化学的その他の自然的属性ではありえない。商品の物的属性は、一般に、それらが商品を有用にし、したがって使用価値にするかぎりではしか問題にならない。ところが、他方、諸商品の交換関

係を明白に特徴づけているものは、まさに諸商品の使用価値の捨象なのである。この交換関係のなかでは、或る一つの使用価値は、それがただ適当な比率でそこにありさえすれば、ほかのどの使用価値ともちょうど同じだけのものと認められる⁽¹⁷⁾。「使用価値としては、諸商品は、なによりもまず、種々に違った質であるが、交換価値としては、諸商品はただ種々に違った量でしかありえないのであり、したがって一分子の使用価値もふくんではいないのである」。「そこで、商品体の使用価値を見ないことにすれば、商品体に残るものは、もはやただ労働生産物という一属性だけである⁽¹⁸⁾。「それらに残っているものは、同じまぼろしのような対象性にほかならず、無差別な人間の労働の、すなわちその支出の形態にかかわらない人間の労働力の支出の、ただの凝固物にほかならない。……（中略）……このようなそれらに共通な社会的実体の結晶として、これらのものは価値——商品価格なのである⁽¹⁹⁾」。

このような『資本論』の価値規定の方法をめぐるのは、周知のように、理論的に不備があるとする宇野弘蔵氏からの批判がある。価値の実体規定をするためには、資本の生産過程や労働の社会的配分の存在が必要なのであって、価値法則の論証は、商品論のところではなく、資本の生産過程においてこころみられるべきであると、以下のように述べている。

「資本の生産過程は、その商品経済の形態規定に対応して労働生産過程自身も、特に機械的大工業の出現によって、単純な平均労働によって行われるものになるのであって、根底からの商品化によって、その生産物の商品としての交換をも必然的にその生産に要する労働を基準とすることになる⁽²⁰⁾」。

このように、価値の実体規定、価値法則の論証の方法が変わっても、使用価値の位置づけは、つぎのように置かれる。そして、価値、価格は、商品の使用価値の「物的性質」とは関係がないことになっている。女性労働者が「第二の労働者」であったと同じように、使用価値は「第二の価値」なのである。

「商品は、種々異ったものとして、それぞれ特定の使用目的に役立つ使用価値としてありながら、……（中略）……その物的性質と関係なく、質的に一様で量的に異なるにすぎないという一面を有している。商品の価値とは、使用価値の異質性に対して、かかる同質性をいうのである⁽²¹⁾。「商品は、その所有者にとって他の商品との交換の基準となる、その価値を積極的要因となし、……（中略）……その使用価値を……（中略）……消極的条件とするものである⁽²²⁾」。

さて、岩井克人氏。「アダム・スミス以来の経済学は、人間が資本主義の中心を占めていると考えてきました。人間が価値を生み、人間が剰余価値をつくりだすと語ってきました。だがそれは、産業革命からつい最近まで、資本主義社会のなかに大きくしかし安定した（交換比率の……篠原）差異が存在していたことの歴史的な産物でしかなかったのです。差異があまりにも大きくあまりにも安定していたので、人びとはその背後に剰余価値を生み出す能力をもつ「人間」という存在を仮定してしまったのです⁽²³⁾」と考えておられる岩井克人氏、もちろん、「資本主義とは利潤を生みださなければ資本主義ではありません⁽²⁴⁾」と理解されている訳であって、岩井氏の経済学でも、商品の使用価値の性格などは利潤獲得にかかわるかぎりにおいてしか俎上にのり、

評価されないこととなっている。

岩井氏は、ここで、「アダム・スミス以来の経済学は、人間が資本主義の中心を占めている」という、また、すでに本文で紹介しておいたように、マルクスの考え方を「人間の社会的な労働のみが価値を生産し、したがって剰余価値を生産しうるのだという徹底した人間中心主義にほかならない」と述べておられたが、特にマルクスにかぎっていえば、まったくの誤解にすぎない。差異の原理であれ、なんであれ、利潤目的でしか経済活動が展開しえない、そのかぎりでは、人間は、それに支配され、疎外されざるをえない資本主義社会のあり方をマルクスは批判している。『資本論』はそのことを明らかにしているのである。氏のような誤解を生みだしている原因の一つは、資本主義市場経済そのものの社会的意味の理解に欠けているからなのではなかろうか。

ともあれ、使用価値の評価を格上げしていくためには、利潤追求を原理としている資本主義市場経済のあり方を徐々にでもあれ、変えていく必要があるのである。

(2003年2月24日、記)

注

- (1) 足立真理子「対談補論——グローバリゼーションへのフェミニスト分析（アナリティクス）をめぐって——」、上野千鶴子編著『ラディカルに語れば……』所収、平凡社、2001年、313ページ。
- (2) 足立真理子、前掲書、318ページ。
- (3) 詳しくは、次の拙論を参照されたい。
篠原三郎「資本はジェンダーにニュートラルか——二宮厚美氏の所説をめぐって——」、『現代と文化』第101号、日本福祉大学社会開発研究所、1999年。
篠原三郎「第二の労働者——労働力の価値と性差別——」、『日本福祉大学経済論集』第22号、日本福祉大学社会開発研究所、2001年。
- (4) 二宮厚美「ジェンダー視点の社会政策と資本主義の解剖——階級関係とジェンダー視点の理論的交錯——」、佛教大学総合研究所編『ジェンダーで社会政策をひらく』所収、ミネルヴァ書房、1999年、118ページ。
- (5) 資本がジェンダー・ニュートラルであるか、どうかをめぐっては、伊藤誠氏も、「直接原理論の内部の問題になるかどうかは別として、歴史を理論的に解明するマルクス経済学においては、資本主義経済自体の発展に……（中略）……家父長制的ジェンダー差別を許容しやすい社会的スペースの存在をみとめうるのみならず、その世界史的発展基盤をなす市場経済の展開にも……（中略）……本来的にジェンダー・ニュートラルとはいえない側面を認めうるのではなかろうか」（『資本主義市場経済はジェンダー・ニュートラルか』、『アソシエ』V、御茶の水書房、2001年、156～157ページ）と、述べておられるが、私見は、「直接原理論の内部の問題」としても、ニュートラルではありえないことを主張している。本稿も、その主旨にたって展開している。
- (6) K. Marx, *Das Kapital*, Erster Band, Dietz Verlag, Berlin, 1953, S. 75. (『資本論』第一巻第一分冊、マルクス＝エンゲルス全集刊行委員会訳、大月書店、1961年、126～157ページ)
- (7) K. Marx, a. a. O. S. 184. (邦訳、第一巻第二分冊、57ページ)
- (8) K. Marx, a. a. O. S. 42. (邦訳、第一巻第一分冊、72ページ)
- (9) K. Marx, a. a. O. S. 40. (邦訳、第一巻第一分冊、69ページ)
- (10) 使用価値の社会的性格論については、下記の拙論を参照されたい。
篠原三郎「使用価値とは何か——そのフェティシズムをめぐって——」、『日本福祉大学経済論集』第

19 巻, 日本福祉大学社会開発研究所, 1999 年.

- (11) 永谷清氏も, 「商品は形式的には平等派であるが, 実質的には差別主義者なのである」と, つぎのように指摘しておられる.

「商品経済が発展すると, どの時代どの所においても商品またその所有者間に貴賤の差別構造を生むのは商品の本性から来ている. 商品は形式的には平等派であるが, 実質的には差別主義者なのである. これは現在も市場経済を美化する人達が見落としてしまう点である」(『資本主義の核心』, 世界書院, 1997 年, 91 ページ)

ちなみに, 永谷氏は, 価値形態論で「C 一般的価値形態」にもなれば, 等価形態に立てる商品には, 奢侈の商品(したがって, 相対的価値形態には平民商品群)になるであろうと, (等価形態にリンネルを置いた) マルクスの例示の不適切さを指摘しておられる(同著, 94 ページ).

- (12) 女性労働者の産業予備軍化については, (3) の拙稿「第二の労働者」を参照されたい.
- (13) 本文のような差別社会的背景のもとに, この社会の特有なセクシュアリティ文化が, あらゆるところで形成されていく. パルノは, その典型であろう.
- (14) 岩井克人『貨幣論』, ちくま学芸文庫, 1998 年, 227 ページ.
- (15) このような資本主義市場経済であるがゆえにこそ, 人類史上, それ以前の社会のあり方にたいし, いかに大きな影響, 変化を与えてきているかは周知の通りである.
- (16) ブランドという使用価値をめぐる問題については, つぎの拙論を参照されたい.
篠原三郎「石井淳蔵著『ブランド——価値の創造——』を読んで」, 『現代と文化』第102号, 日本福祉大学社会開発研究所, 2000 年.
- (17) K. Marx, a. a. O. S. 41~42. (邦訳, 第一巻第一分冊, 71~72 ページ)
- (18) K. Marx, a. a. O. S. 42. (邦訳, 第一巻第一分冊, 72 ページ)
- (19) K. Marx, a. a. O. S. 42. (邦訳, 第一巻第一分冊, 73 ページ)
- (20) 宇野弘蔵『経済原論』, 岩波全書, 1964 年, 61 ページ.
- (21) 宇野弘蔵, 前掲書, 21 ページ.
- (22) 宇野弘蔵, 前掲書, 22 ページ.
- (23) 岩井克人『資本主義を語る』, ちくま学芸文庫, 1997 年, 32 ページ.
- (24) 岩井克人, 前掲書, 31 ページ.